

 労協連だより

古村 伸宏

7月を迎え、早2011年も半年が経過した。3月11日を境に、時間の重みや季節の移ろいに対する感情・感覚も、大きく変化したように思う。節電の大合唱で始まった暑い夏も、どこか気持ちの引っ掛かりが解消されないまま、うだる暑さに汗がまとわり、不快指数が高止まりしそうだ。

労協連、センター事業団の総会・総代会は、当初の予想を大きく超え、深く決意に満ちた意思統一の場となった。総会史上初めてとなる映画上映(「ミツバチの羽音と地球の回転」)を食い入るよう見つめる参加者たち。被災地の仲間の発言に涙しながら自戒の念を強めた仲間たち。気仙沼で牡蠣の養殖を営みながら森に木を植える運動を20年以上続けてきた方の話に、生命と自然の持つ壮大な循環を感じ、これを大事にする仕事おこしに思いを馳せた仲間たち。総会・総代会の企画の中から、それぞれの参加者が自分のやるべきことを問い合う3日間だった。

そして、昨年度の「新時代の労働政策」づくりの呼びかけの第2弾として、「公的就労・訓練事業」制度の提案(第一次案)が行われた。被災地で仕事を求める人々に対応すべき制度事業と、震災以前から社会全体を覆っていた「孤立」「失業」「貧困」がなぜ広がってきたのか、についての見解をまとめ、「完全就労社会」の実現のために、

上記制度事業とあわせて、「コミュニティ就労・事業支援条例」と「協同労働法制化」を3点セットで提起している。考え方の基本にあるのは、官主導・大企業中心の「労働政策」「産業政策」を、市民・地域主導、コミュニティ事業者が担い手の中心となる、という点だ。そこに登場する「産業」と「労働」を政策的に結びつける「コミュニティ経済」が、我々の仕事おこしと社会連帯活動の中心テーマとなる。これも総会・総代会での重要な意思統一であった。

それにしても、「原発」である。総会・総代会では、原発に対する大きな憤りと反省の声がたくさんあがった。これを受けて、労協連理事会では、内橋克人さんたちが呼びかけている「さよなら原発1000万人アクション」への参加を決定した。巷では、原発の話題はタブーではなくなりつつある。先日所要で帰郷した際も、友人と話題になるのは「原発」だった。知らされてこなかった歴史と、知る努力を欠いてきた多くの人生。人々は今、様々な疑問・自問が頭を去来している。社会とは、暮らしとは、豊かさとは、生きるとは…誰のため・何のためなのか。最近の職業訓練での私の定番は、「あなたの『働く』は誰のため、なんのため」シリーズである。生命活動の本質が問われる、日本人という存在が、暑い夏に彷徨う。